

## 鎚起銅器

江戸時代中期に仙台の職人が伝えたといわれる鎚起とは、文字通り鎚で起こす、すなわち一枚の丸い銅板を焼きなまして、木製の台の円型につくられた凹みにあてて、木鎚で打ち込む。

最初のうちは台の上に転がしながら鉢型にし、さらにつぼ型にしてゆく。

ある程度形がすぼまってくると、鳥口（当て金）と称したものを台の穴に立て、その先に器の内側をあてがって目まぐるしく微妙な鎚さばきで打ちすぼめていく。

また、銅が途中で硬くなるのを防ぐために、なんども焼きなましをくりかえすため器をホド場（炉）に入れ、冷やしてから鎚打ちをする。

最後は鎚肌をついた器を硫化カリウム液につけたのち、みがきをかけ緑青水で煮た後でつや出しをして仕上げるが、こうして一枚の銅板から水差し、湯沸かし、鍋や火鉢、あるいは花器・香炉・茶器など高級美術品まで打ちだす。

